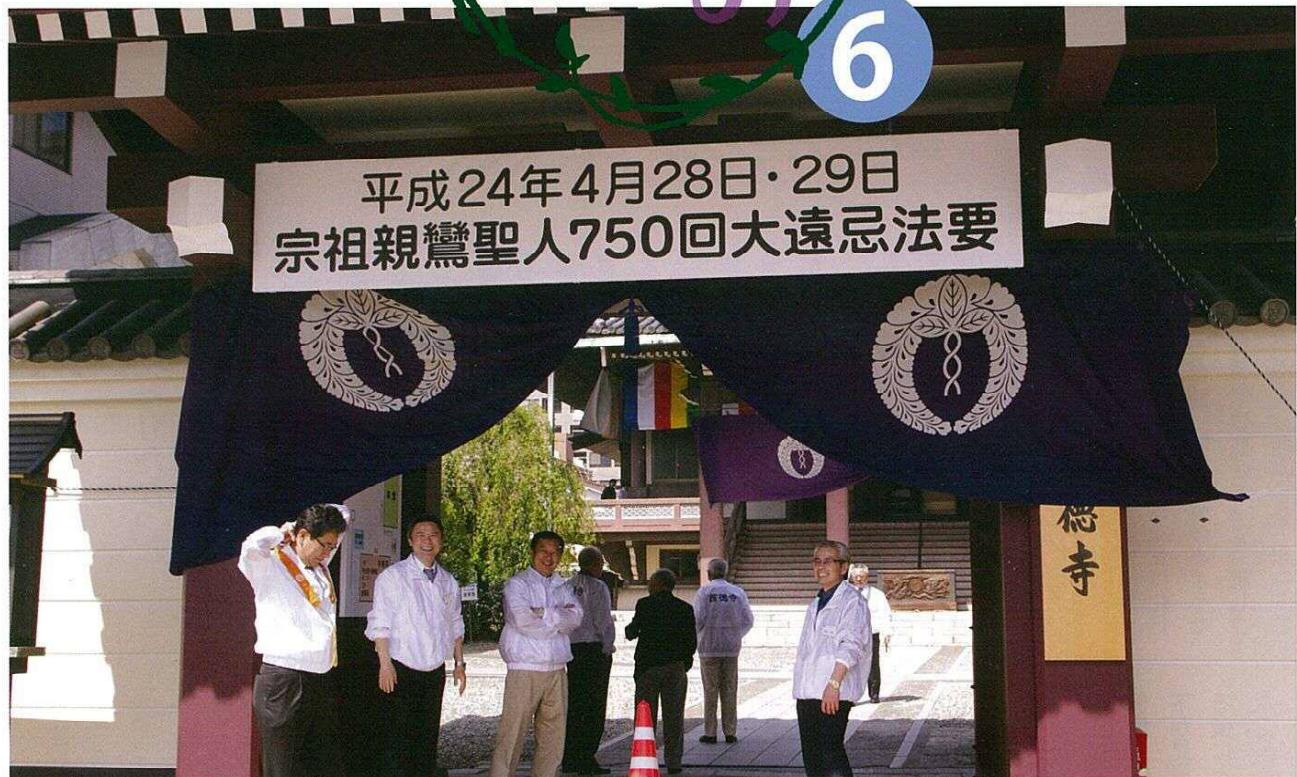


南無阿弥陀仏は
私のいのち



〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobiir.jp/>
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



なすべき事

今までのように電気が使えないことが知られて
から、様々な対策が立てられた。しかし、どれだけ
対策を練つても、いいようのない不安は消えない。
それは、電気がどうやって作られ、私がどれだけ電
気になつていなかから、そうした自分の日常の姿が明
らかになつていいから、余計に不安が残るのではないだろ
うか。

沢山の人のはたらきによつて電気が作られて、私達の生
活が支えられている。長期的な政策をふまえて十分に検討
される事柄ではあるが、とりあえず自分の為すべき事を行
いたい。

衣替えの季節を迎えた。先日、扇風機を求めて店に行く
と、店頭には「省エネ」という言葉があちこちに並んでいた。
消費電力の少ない商品が注目を集めていて、値段が高くて
もすぐに売り切れてしまうのだそうだ。節電と呼ばれる中、
何か自分に出来ることはないだろうか、そうした思いの表
れだと感じる。

計画停電が行われた頃、関東では多くの街灯が
消えた。その光景の中で街の人々は「今まで沢山の明
かりの中で過ごしていなんですね」とテレビのイン
タビューで答えていた。失ってから初めて気づかさ
れるというのは、どんなことにも当てはまるのではないか
だろうか。

今までのように電気が使えないことが知られて
から、様々な対策が立てられた。しかし、どれだけ

対策を練つても、いいようのない不安は消えない。
それは、電気がどうやって作られ、私がどれだけ電

気に頼つているのか、そうした自分の日常の姿が明
らかになつていなかから、余計に不安が残るのではないだろ

群生海

一刻者の背中

墨田区在住 並木 良繁さん



今回は墨田区向島で自動車修理工場を営んでいる並木良繁さんにお話を伺います。

自衛官になりたかつた

子供の頃から模型などを作ることが好きで、工場の部品や道具を使ってよく遊んでいました。高校一年の時、父親に勧められて三級整備士の国家資格を取得しました。しかし、僕自身は小学生の頃からパイロットになるのが夢で、自衛官を目指していました。ところが大学受験に失敗し、浪人することを許さなかつた父親との賭に負けて後を継ぐことを余儀なくされ、トヨタ自動車の整備学校に進むことになりました。

夏冬の暑さ寒さを堪え忍び、地道な仕事を黙々とこなしている父親の背中を幼い頃から見ていて、家業だけは繼ぐまいと心に決めていただけに戸惑いは残りましたが、父との約束を果たすために、この世界に飛び込んだんです。今はこの仕事に就いたことで、あらためて気づかされることがたくさんあるんです。

毎日が新鮮で面白い

自動車の修理というのは同じようでは実は違うんですよ。車検を受けに行くにしても毎回、試験を受けるようなもので微妙な緊張感があつて、厳しさの中に面白味があるんです。また、お

理するわけにはいかない、そこにこの仕事の醍醐味がありますね。

最近では自分の手に負えないと、すぐ「ティーラーに任せてしまう車屋さんが圧倒的に多いんです。「引き受けた仕事は最後までやり遂げろ」が亡くなつた父親の口癖で、「一刻者だった父親は途中で仕事を投げ出すことを許さなかつた。そのお陰で自分でも懸命に技術を磨き、今では反対にトヨタや日産から修理を頼まれるまでになりました。

足下が見直される

仕事の傍ら、二十年前から都立職業訓練学校の非常勤講師を勤めていますが、どうしたら生徒さんの理解を深められるか、指導方法に苦労しています。

普通の専門学校と違って、入学者の年齢層が十八歳から四十一歳と幅広いんですよ。生徒さんの能力に応じて教えるといふことはとても難しいのですが、同僚の仲間と話し合ったり、父親から教えたノウハウを糧に生徒さんに向き合っています。教えることで自分の足下が見直される、これは一人の車屋である僕にとってもかけがえのない場所になっています。

お内仏（おないぶつ）とは、お仏壇のことであり、またその中にお迎えしたご本尊を指します。もとは寺院における住職家族用の仏壇を本堂の仏様と区別する意味もあって特にお内仏と呼ぶようになったようです。真宗では、寺院のみでなく各家庭に安置される仏壇も御内仏と呼びます。

なん
で?
「お内仏」

御内仏の中心は、あくまで「ご本尊」です。今のような箱形の仏壇が主流になるとずっと以前から、床の間にご本尊を掛けでお給仕し、生まれた意義と生きる喜びを確かめてきたのです。ですから逆に、ご本尊を御安置するところがお内仏と心得たいものです。決して先祖や死者を祀る場所ではありません。たとえ家庭に不幸がなくとも家庭の中にはご本尊がなくてはなりません。亡き方のご法名をおかざりするのは亡き方は諸仏となり、私たちに仏縁を与えて下さるからであります。

〔岸本 秀一記〕

十二光の八番目は、智慧光で、闇を照らし続ける阿弥陀仏のまことの光です。親鸞聖人は、智慧光について、「無明の闇を破するゆえ 智慧光仏となづけたり 一切諸仏三乗衆ともに嘆誉したまえり」(阿弥陀仏の光は愚かで無知な人間の闇を照らし尽くして破るから、智慧光仏といわれる。それすべての仏・菩薩・仏弟子たちは愛され、智慧の光の仏とこそつてほめ讃えられる)と和讃されます。

「むかし愛すこしまえ金いまのち」といった人がいます。若い時は愛されあればと夢中になり、中年には金さえ手に入れようと懸命に生きて、老いが見えだしたら健康が第一になつたというのでしよう。ふりかえれば、わかつていたつもりの人生は、自分の都合に振り回されてきただけで、しかも都合よく行かなければ、自分以外のせいにして、愚痴を増やし続けて、世間を狭くしてきただけでないでしょうか。

こうして蓄積してきた人間の無知は、自分で気付くことができません。「無明の闇」に左訓して「闇にてくら

し」という、無知とも知らぬ闇の深さは、智慧の光に遇つて知らされるのです。闇を闇と知らせる智慧光に出遇つたのが、仏・菩薩・仏弟子たちです。だから、闇と知らされ闇が



松井憲一
むげむたいこうえんのう
正信偈の話⑩
ふほうむりょうむへんこう
普放無量無辺光、無碍無対光炎王、清淨歡喜智慧光、
ふだなんんしむしうこう
不斷難思無称光、超日月光照塵刹。一切群生蒙光照。
（あまねく、無量・無辺光、無碍・無対・光炎王、清淨・歡喜・智慧光、かぶ
不斷・難思・無称光、超日月光を放って、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。）

の不斷の光を感じ得する者は、本願を聞いて絶えることのない信心によつて往生する」と和讃されます。

億万年のいのちのリレーでいただいた身体でさえ、「肝臓を鍛えるために今日も飲む」といふ、若くして逝く人もいるのに高齢を嘆いて、わが

鸞聖人は、不断光について「光明でらしてたえざれば 不断光仏となづけたり 聞光力のゆえなれば 心不絶えることなく照らし続けるので不

断光仏」という。この不斷光は、都合のよい解釈に立つわたしを、絶えず照らすとともに、「法を聞きて信じて常におたえぬ」と、聞法の座に着かす原動力です。野口雨情は、孫に「耳で聞いたことだけが、まこと」といわれました。聞いて覚えたことは忘れますが、忘れるからこそいつも初事と聞き続けられるのが聞法です。

そして、「心不斷て往生す」については、「弥陀の誓願を信ぜる心不斷して往生すとなり」と左訓されます。教えを聞信することで、いつも自分が解釈の間違いを知り、弥陀の誓願に帰えるのです。往生は、「信心のさだまるとき、往生またさだまるなり(『末燈鈔』)といわれるよう、肉体の死をいうのではありません。常に解釈に死んで、現実をあるがままに受け取る、事実に生きる至福の歩みをいたたくことが往生なので

す。

「聞光」とは、聞きなれない言葉ですが、聞光力の左訓には「聞くといふはこの法をきくといふ。聞くといふはこの法をききて信じて常にたえぬこころなり」といわれます。不断光は、都合のよい解釈に立つわたしを、絶えず照らすとともに、「法を聞きて信じて常にたえぬ」と、聞法の座に着かす原動力です。野口雨情は、孫に「耳で聞いたことだけが、まこと」といわれました。聞いて覚えたことは忘れますが、忘れるからこそいつも初事と聞き続けられるのが聞法です。

山門の言葉

むみょうじょうや とうこ
無明長夜の燈炬なり



遠方にいる友人と電話で会話をしているとよく尋ねられることがある。それは「一体何の勉強をしているのか」という問いである。それに対し「仏教の勉強をしている」と答えると「仏教とは何か」という問い合わせに返つてくる。その返答に私はいつも困つてしまふ。

また諸先輩方との会話でも、どちらかというと黙つて聞いていることが多い。言いたいことがまとまらないといふこともあるのだが、正直言い返されるのが怖いので黙つている。

その反面、法事でご門徒の家に行き話をさせていただくと、非常に堂々として受け答えをしている自分がいるのも事実である。

無明長夜ということで明かりのない

真っ暗闇な世界、つまり私達の生きている世界だと教えられる。しかし自分はそんな闇の世界を生きているなどとは思いもしないで生活をしている。それが『凡夫』という言葉で言い当てられている。

(蓮井 邦宗 記)

親鸞聖人は、凡夫のことを、煩惱が身にみちみちて、いかりやはらだち、そねみやねたむ心ばかりで、その心は臨終の一念までできえず、たえずと教え勉強をしている」と答えると「仏教とは何か」という問い合わせに返つてくる。

自分にとつて都合の悪いことには腹を立てたり、ねたんだりする。都合がよければ自分の意見を主張しようとするとする。そういう人や場所を自分の思いで選んで、普段の生活を過ごしている。そういつた自分勝手に物事を分別するあり方を無明長夜という言葉で表されているのではないか。

自分自身を問題とせず、周りにばかり責任をおしつける。そういう私共の勝手な思いをはるかに超えて、阿弥陀の燈炬は常に私共を照らし出し、見護つてくださつている。

私自身、友人の何気ない一言に腹立たしさを覚えながらも、答えられない悔しさがあった。この問いを手がかりとして、もう一度自分自身に「一体何が問われているのか」を課題としている。

親鸞聖人は、凡夫のことを、煩惱が身にみちみちて、いかりやはらだち、そねみやねたむ心ばかりで、その心は臨終の一念までできえず、たえずと教え勉強をしてくださつていている。

自分にとつて都合の悪いことには腹を立てたり、ねたんだりする。都合がよければ自分の意見を主張しようとする。そういう人や場所を自分の思いで選んで、普段の生活を過ごしている。そういつた自分勝手に物事を分別するあり方を無明長夜という言葉で表されているのではないか。

日本では中陰である四十九日の間、死者が次に生まれ変わる世界が決まるまで、靈魂がこの世を彷徨つものと信じられてきました。その為、残された遺族が鎮魂の追善供養として七日ごとに葬儀中に繰り上げて勤めることが多くなりました。

日本では中陰である四十九日の間、死者が次に生まれ変わる世界が決まるまで、靈魂がこの世を彷徨つものと信じられてきました。その為、残された遺族が鎮魂の追善供養として七日ごとに葬儀中に繰り上げて勤めることが多くなりました。

日本では亡くなつた方への供養ではなく、残された家族の社会復帰の時間として七日ごとの法要を勤めてきました。遺族の心が整理され、かけがえのない人を失つた悲しみが少しずつ癒されていく。次第に心が落ち着いていく中で、仏様となつた故人に向き合えるようになるまでの期間として大切に當ま

れてきました。

(木村 専正 記)

葬儀あれこれ

2

最近、葬儀式の打合せで「初七日の法要は式中でお願いします」という依頼が目立ちます。本来であれば亡くなつてから七日目に當む中陰法要としての法事ですが、遠方からの参列者や多忙な方々への配慮、または斎場の都合で

お盆

「お盆」は、インドの言葉「ウラナンバナ」の音写語で、「盂蘭盆」（うらぼん）を省略した言葉です。「倒懸」と訳され、意味は「さかさまに吊るされる」ということです。お盆の行事は、インドではなく、仏教が中国に伝播する中で成立したようです。日本では657年に、飛鳥寺の西に須弥山の像をつくって盂蘭盆会を設けたのが始まりといわれ、今日盂蘭盆会は「歓喜会」「精靈会」ともいわれます。

釈尊の時代、佛教教団は遊行の生活をおくりますが、雨季のときは遊行ができず、二所に留まり修行をしたようです。その修行を安居といいます。雨季があけ、安居が終つた日に人々が衆僧に飲食などの供養をしたといい、その行事が転じて、祖先を供養し、さらに餓鬼に施す行法（施餓鬼）となつていき、それに、儒教の孝の倫理の影響を受

けて成立したと思われる、目連尊者の亡母の救いのための衆僧供養という伝説が附加され、今日の行事につながつたといえます。

盂蘭盆経には、安居の最中に、神通第一の目連尊者が亡くなつた母親の姿を探すと、餓鬼道に墮ちていたとあり、喉を枯らし飢えていたので、水や食べ物を差し出したが、どうしたものかと釈尊に訊ねると

「安居の最後の日に対する修行者に食べ物を施せば、母親にもその施しの一端が『に入るだらう』と答えられた。そこで目連尊者はその通りに実行し、すべての修行者に布施を行い、修行者たちは飲んだり食べたりと大喜びをした。すると、その喜びが餓鬼道に墮ちている者たちにも伝わり、母親の口にも入つた

る現在のお盆につながつてきます。

しかし、この話を読み直すと別の受け取り方が見えてきます。目連尊者は母一人子一人の家庭に育ち、母は必死の思いで目連を育てました。その結果周囲に迷惑をかけることも多く、当然のこととして、母は餓鬼道に墮ちた。目連の存在が母を餓鬼道へと追い込んだ。そのことを釈尊から教えられた目連は

「母が墮ちたのではなく、追い込ん

だ私がいた」と気づきます。当たり前と感じていた今までの自分の思いが逆さまであつたと知るのです。

「さかさまに吊るされる」とは、すべてかけがえのない繋がりの中に育まれていたことを忘れ、自分ひとりで生きてきたように思う在り方を表わしています。すると、お盆とは、亡き人を縁として、かけがえのない自身に出会う行事であるといえます。この話が祖先を供養す



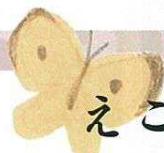
掲示板

平成24年

6月

- 1日(金) 午後2時 評議員会定例役員会
2日(土)・3日(日) 仏教青年会研修旅行
9日(土) 午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 蓮井 邦宗
10日(日) 午後2時 城東ブロック会総会・聞法会
(人形町香港美食園)
13日(水) 午後1時 婦人会聞法会
本山リーフレットに聞く
「ほとけの子」

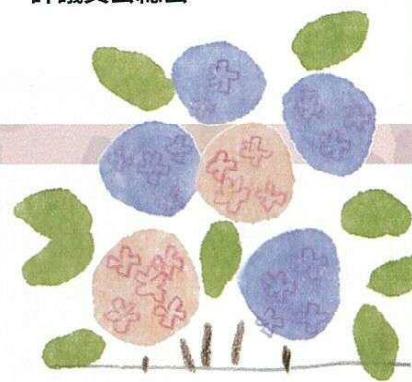
- 16日(土) 午後1時半 定例聞法会
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
17日(日) 午後2時 城北ブロック会総会・聞法会
(川口 リリア)
19日(火) 午後1時半 教行信証『信巻』に聞く(第80回)
講師 宗 正元師
23日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 仲井 真裕
24日(日) 午後3時 評議員会総会



えこお志お礼

世田谷区 細坂 幸一様
栃木県 白井 融光様
埼玉県北 中島 丈夫様

日誌



- 4月 14日 混声合唱団「エコー」練習
同行会総会 「正信偈の教え」に聞く
法話 山崎 哲
4月 17日 仏教青年会総会
4月 18日 婦人会総会 参加者 53名
4月 19日 教行信証「信巻」に聞く(第78回)
講師 宗 正元師
4月 21日 定例聞法会
混声合唱団「エコー」練習
4月 27日・28日 宗祖忌
4月 28日・29日 親鸞聖人750回大遠忌法要
5月 7日・8日 中興忌
5月 12日 合唱団「エコー」結団式
同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 大橋 伊知郎

編集後記

4月の大遠忌法要では総代会をはじめ、評議員会・婦人会・青年会、そして学生のアルバイトの方々にお手伝いをいただき、何とか無事に勤めることができました。あらためて御礼申し上げます。

ある役員の方が「2日間、とても忙しかったが、楽しかったよ」と声をかけて下さいました。準備に追われ、無我夢中で過ごしていた私にとっては何よりも嬉しい言葉でした。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：<http://saitokuji.tobiiryo.jp/>

